

# □ 第19回東京国際 音楽コンクール 〈指揮〉

大 坪 盛

日本国内では唯一の指揮者コンクールであり、世界でも広くその存在を知られている「東京国際音楽コンクール〈指揮〉」の第19回が、コロナ禍の厳しい状況のもと、2021年9月から10月にかけて開催された。

「広く有能な音楽家の参加を求め、優れた人材の発掘、育成に務め、世界の楽壇への活躍を力強く支援すると共に、国際間の文化交流を推進し、音楽文化の発展に貢献するものである。」の主旨のもとに、1967年にスタートした「東京国際音楽コンクール〈指揮〉」（スタート時は民音コンクールの〈指揮部門〉）としてスタート、1987年に現在の名称に改称する）は、若手指揮者の登竜門として、3年毎に実施されてきた。

過去のコンクールでは、手塚幸紀、小泉和裕、尾高忠明、アラン・バルター、十束尚宏、大野和士、飯森範親、本名徹次、パスカル・ヴェロ、栗田博文、フランシスコ・デ・ガルヴェス、下野竜也、柳沢寿男、川瀬賢太郎、ディエゴ・マルティン・エチェバリア、沖澤のどかなど、内外で活躍している指揮者が輩出されてきた。

今回は世界的なパンデミックのため、当初は開催が危ぶまれたが、同コンクール史上、最多の49ヶ国・地域、331名が応募、「書類・映像選考委員会」で選ばれた6ヶ国、14名（2名辞退）が第1次予選（9月27日～28日）に臨んだ。更に第2次予選（9月29日～30日）に4ヶ国8名、本選（10月3日）には4ヶ国4名が進み、次の通り入賞者が決定した。（尚、第1次予選、第2次予選では東京フィルハーモニー交響楽団、本選は新日本フィルハーモニー交響楽団が共演した。会場はいずれも東京オペラシティ コンサートホール）

- ★第1位＝ジョゼ・ソアーレス（23歳、ブラジル）
- ★第2位＝サミー・ラシッド（28歳、フランス）
- ★第3位＝パーティー・ベイジェント（26歳、イギリス）
- ★入選・奨励賞＝米田覚士（25歳、日本）
- ★特別賞（齋藤秀雄賞）＝パーティー・ベイジェント
- ★聴衆賞＝ジョゼ・ソアーレス
- ★オーケストラ賞（新設）＝パーティー・ベイジェント

審査員は、尾高忠明（審査委員長）、シャーン・エドワーズ（イギリス）、広上淳一、オッコ・カム（フィンランド）、ライナー・キュッヒル（オーストリア）、準・メルクル（ドイツ）、ユベール・スダーン（オランダ）、高関健、梅田俊明。今回から審査委員長に尾高忠明が就任した。尾高は齋藤秀雄、朝比奈隆、外山雄三に続く4代目の審査委員長となる。

パンデミック下で実施が予定された今回、すべてにおいて開催が危ぶまれていたが、尾高審査委員長を初め、関係者の開催への意気込みは高かった。尾高審査委員長は「中止や延期も覚悟したが、主催者の『日本人審査員だけでも開催する』という決意を聞いて勇気づけられた」と語っている。史上最多の応募者数も、力強い励みとなったに違いない。

本選は、課題曲であるロッシェニの歌劇「どろぼうかささぎ」

序曲と、各自があらかじめ提出した自由曲1曲の指揮によって選考が行われた。

1位となったジョゼ・ソアーレスは、自由曲でストラヴィンスキーのバレエ組曲「ペトルーシュカ」を選んだ。ソアーレスは現在ブラジルのミナス・ジェライス・フィルハーモニー管弦楽団のアシスタント・コンダクターを勤めている。2位のサミー・ラシッドは、室内楽奏者、チェリストとしても活動している。自由曲でサン＝サーンスの交響曲第3番「オルガン付き」を選んだ。

第3位のパーティー・ベイジェントは、リヒャルト・シュトラウスの交響詩「死と変容」を自由曲に選び、特別賞の「齋藤秀雄賞」に加えて、新設されたオーケストラ団員の投票による「オーケストラ賞」を授与された。また、日本人唯一のファイナリストである米田覚士はチャイコフスキーの幻想的序曲「ロメオとジュリエット」を自由曲で指揮、奨励賞を授与された。前回のコンクールでは3位までを日本人が独占したが、今回は3位までを外国勢が独占するという結果となったが、尾高審査委員長は「結果は偶然で、今回は出場者を決める審査中からレベルは高く、国籍に関係なく選考ができた」と述べている。また、ヴァイオリニストでウィーン・フィルハーモニー管弦楽団のコンサートマスターでもあったライナー・キュッヒルが審査のポイントとして「演奏の面白さ」を挙げていたのが興味深い。

このコンクールの後に行われた「ショパン国際ピアノコンクール」をはじめ、国内で行われた各コンクールでも、応募者がこれまでない数に上ったものが多かったと聞く。コロナ禍でも音楽に対する情熱は些かも衰えていない。指揮界の未来を担う若きコンテスタントに願うところ大である。と同時に、オーケストラ界やオペラ界にも積極的に才能ある若き指揮者の起用を期待したい。